

# お姉ちゃんといわれて

小川未明

青空文庫



光子さんが、学校へいこうとすると、近所のおばあさんが、赤ちゃんをおぶって、日の当たる道の上に立っていました。

「お姉ちゃん、いまいらつしやるの。」と、おばあさんは、声をかけました。

光子さんは、にっこりとしたが、そのまま下を向いて、だまっていつてしまいました。

「わたし、お姉ちゃんでないわ。」と、光子さんは、つぶやきました。

あんなにたのんでも、赤ちゃんを、だっこさしてくれないのに、なんでお姉ちゃんといふのだらう。私は、お姉ちゃんといわれても、ちっともうれしいことはないわと、光子さんは、道を歩きながら、思いました。

そして、おばあさんが、いじわるのような気がして、ていねいにあいさつする気にもなれなかったけれども、赤ちゃんは、かわいらしくて、ほんとうに、あのほおずきのようなほおをぶつと吹いてやりたくなつたのでした。

「どうして、私に、赤ちゃんをだっこさしてくれないのでしょうか。」

ある日、おばあさんは、光子さんのお母さんに向かって、

「このごろ、お光ちゃんは、なにかお気にさわつたことがあるとみえて、怒っていらつし

やるのですよ。いくら考<sup>かんが</sup>えても、なにがお氣<sup>き</sup>にさわったかわかりませんが、どうかお母<sup>かあ</sup>さんから、きいてみてくださいませんか。」と、たのみました。

こういわれたので、お母<sup>かあ</sup>さんは、びつくりして、

「まあ、そんなことがあつたのですか、それは、なにかおばあさんの、お考<sup>かんが</sup>えちがいで、ありませんか。しかし、あんなおてんばですから、もし失<sup>しつれい</sup>礼<sup>れい</sup>をしましたら、どうぞごめんくださいまし。」と、おわびなさいました。

「いえ、そんなつもりで、いったのでないのですよ。私<sup>わたし</sup>に氣<sup>き</sup>がつきませんから、なにを怒<sup>おこ</sup>つていらつしやるのか、お光<sup>みつ</sup>ちゃんに、おききしてもらいたいです。こないだも、お姉<sup>ねえ</sup>ちゃんと声<sup>こえ</sup>をかけますと、下<sup>した</sup>を向<sup>む</sup>いて、にげていって、おしまいなさるのです。きつとなにか怒<sup>おこ</sup>つていらつしやるに、ちがいありません。」と、子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>の心<sup>こころ</sup>がわからぬまま、おばあさんは、母<sup>はは</sup>親<sup>おや</sup>にきいてもらうよう、笑<sup>わら</sup>いながらたのんだのでした。

「まあ、そんなまねを、光<sup>みつ</sup>子<sup>こ</sup>がしたのでございますか。」と、お母<sup>かあ</sup>さんは、顔<sup>かお</sup>を赤<sup>あか</sup>くして、おばあさんに、きまりのわるい思<sup>おも</sup>いをなさいました。

「いいえ、けつして、お光<sup>みつ</sup>ちゃんをしからんでください。自分<sup>じぶん</sup>に、わけが思<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>せないから、おききしたのです。」と、おばあさんも、とがめるつもりで、いったのでないと、恐<sup>き</sup>

縮ようしゆくしました。

お母かあさんと、おばあさんの、二人ふたりは、たがいに心こころがわかると、へだてなく、笑わらいながら、世間せけんの話はなしなどして、別わかれたのでした。

お母かあさんは、家いえへ帰かえって、さっそく、光子みつこさんを自分のそばへ呼よびました。そして、おばあさんに対して、どうして、そんな失しつれい礼らいな態度たいどをしたのかと、おききになりました。

光子みつこさんは、しばらく下したを向むいて、だまっていましたが、

「早く、おいしいなさい。」と、お母かあさんに、うながされると、あのときのことを思おもい出して、つい悲かなしくなり、目めから涙なみだを落おとしながら、

「私わたし、お姉ねえちゃんでないんですもの。」と、答こたえました。

「赤あかちゃんから見みれば、あなたは、やはりお姉ねえさんでしょう。」と、お母かあさんは、これにはなにか理りゆう由ゆうがあると、察さつせられて、やさしく、いわれました。

「わたし、お姉ねえちゃんなら、すこしばかり赤あかちゃんを、だっこさしてくれただっていいでしょう。それなのに、いくらおばあさんに、おねがいしても、赤あかちゃんを抱だかしてくれないのですもの。」と、さもうらめしそうに、泣なきながら、母ははおや親おやに、訴うえたのでした。

お母かあさんは、光子みつこさんが、赤あかちゃんをだっこしたいばかりに、じれているのだとささる

と、むしろ、その子供らしい、やさしい心をば、いじらしく思いました。

「ああ、そうだったの。ほんとうに、おまえさんも、赤ちゃんなのね。」と、いつて、笑われました。

その後、このことを、お母さんは、おばあさんに話されたのであります。すると、おばあさんも、急に明るい顔つきとなつて、

「ああ、そうでしたか、私が、わるかったのです。ただあぶないと思つて、いくたびも光ちゃんが、抱かしてくれとおっしゃつたのをだかさなくて、わるいことをしました。それで、よくわかりました。こんど、おんぶしてもらいましようね。」と、いつて、おばあさんも目がしらに、涙をためていられました。

その翌日でした。おばあさんは、外で遊んでいた光子さんと呼んで、

「さあ、赤ちゃんをおんぶしてくださいね。なかなか重いから、だっこは無理です。いま、ひもをかけますから、おんぶしてくださいよ。」と、いつて、光子さんの、小さな背中へ、赤ちゃんをおんぶしてくださいました。

はじめに、赤ちゃんをおぶつて、光子さんは大喜びでした。

日かげにいては、赤ちゃんが、寒いので、日のよくあたる往来へ出ると、赤ちゃんは

うれしがって、おくん、おくんといって、おどり上がりました。そのたびに、力があまっ  
て、光子みつこさんは、ころびそうになるのを、危あやうくこらえました。

「まあ、なんて元げん気のいい、強つよい赤あかちゃんでしょう。」と、光子みつこさんは、うれしかったの  
でした。そして、もし、おばあさんが、ひもでおぶわしてくれなかったら、落おとしてしま  
ったかもしれないと思おもい、そんなことに気きのつかなかった、自分じぶんのわがままを、はじめて、  
わかったと、さどつたのでした。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

初出：「博愛 737号」

1951（昭和26）年1月

※表題は底本では、「お姉《ねえ》ちゃんといわれて」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# お姉ちゃんといわれて

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>